

スイスワインという未知の世界、豊饒な人との繋がり

本書を読み終えて、スイスワインを早速、買って飲んでみようと思った

山井 悟

井上萬葡 著
エコーする(知)
▶ オシャレなスイスワイン
観光立国・スイスの魅力
10・30刊 A 5判168頁 本体1800円
クロスカルチャー出版



ワインはそれなりに飲んできたつもりだが、スイスワインを飲んだことがない。それよりも、本書の冒頭で、著者は「わたしが運命のワインと出会ったのは、今から30年前にレマン湖のほとりにある小さなカフェを併設したレストロ口に出かけた時でした」(はしがき)と書き出している。わたしは、海外渡航をしたこととはないが、もちろんレマン湖は知っている。しかし、強い印象を持った(いまでも持ち続けている)のは、冒険小説の傑作、ギヤピン・ライオールの『深夜アラスタ』(六五年刊、日本語版・六七年刊)を読んだ時からだ。確か、八十年代後半だったと思う。著者がレマン湖でスイスワインと出会ったのと同じ頃かもしれない。それ以前は、湖畔のモントルーで行われるジャズフェスティバルが、レマン湖に関心を向けた最初だった。

スイスといえば、中学生(遙か大昔のこと)の時、社会科の授業で、「永世中立国」だと知り、米ソ冷戦時代の頃だったから、スイスに対し憧れ感を抱いたものだった。本書でも、スイスの長い歴史的時間を述べていて、ローマ帝国時代から他国の侵略にあい、ドイツ、フランス、イタリヤ、オーストリアといった国々に囲まれていたからこそ、「永世中立国」で在り続けることを目指したのが理解できる。さて、チューリッヒ、ベルン、ジュネーブといった都市がある「平地は、アルプス山脈が隆起してから運ばれてき

で生地にまつわることが愛し
み描いていることをわたしは
知らなかった。
そして、『アルプスの少女
ハイジ』の作者、ヨハンナ・
シュピリもスイス出身であ
る。ルソーとシュピリ、二人
がスイスという場所を共通に
持っていたことを、意外でも
なんでもなく、むしろ納得す
る思いを持ってしまうこと
が、スイスという磁場だとい
う気がしてならない。

スイスと親近な関係にある
といえはオードリー・ヘップ
バーン(一九二九〜九三年)
だ。六五年にレマン湖の近
キルジュ近郊のトロシユナ村
に、「美しい庭に囲まれた終
の棲家を購入した」(映画
の撮影が終わると、彼女はこ
こに戻り、自ら市場に出かけ
行って、食材を購入しては、
料理の腕を振ったそう)。
本書から不思議な縁を知っ
たことを最後に述べておきた
い。かつてわたしも共感した、
福岡正信の『わら一本の革命』
を読んで、パコ家の当主・レ
ーモン氏が、「自然との対話
そして、自らのライフスタイ
ルまでを問いただして」、ワ
イン造りに傾注したことが、
語られていく。

スイスワインという未知の
世界に接して、そこに豊饒な
人と人の繋がり、人がその場
所に惹かれる契機ということ
を知って、あらためて、永世
中立という言葉の深さを拡張
したくなつたといっている。
列島という場所は、自分た
ちにとって固有なものを醸成
するのではなく、外部から移
入したものをアレンジしてき
たことと、別のかたちが、四
方山々に囲まれながらも、固
有なものを育ててきたスイス
の篤力をワインを通して受け
取ることができたといってい
る。

本書を読み終えて、スイス
ワインを早速、買って飲んで
みようと思ったと述べておき
たい。
(フリーライター)

TARU BOOKS



森と風と私
—ご先祖と私の物語—

深澤 弘子 著

還暦を過ぎたら、自分がこの世に生きた証のようなものを書き残して置きたいと漠然と考えて日々を暮らしてきた。

七十歳を超えて東京作家大学に出会い、私が人生の後半にしたかった「文章を書く」という世界に身を置くことができた。最初は不安もあったが、今これまでの私が引きずってきた過去を文章という形で吐き出すことができ、幸せを感じる。公立中学校の教師、学童保育所の指導員、結婚、子育て、介護を経て、人生の終盤を迎え、若いときに感じた不安や戸惑いに決着をつけつつ、今こそ自分がどのように生きてきたかをこの本で示したい。

著者プロフィール

昭和20年生。
英語教師、学童保育所の指導員として働きながら、結婚、子育て、介護を経験。

発売：東京作家大学・たる出版
本体：1800円＋税
ISBN978-4-905277-26-2

Books 今月の1冊

チベットの原風景
土屋守 著

ウイスキー文化研究所代表で、雑誌『ウイスキーガロア』編集長であるウイスキー評論家の土屋守氏が、その原点である、学習院大学探検部時代から足かけ6年通った西チベットのラダック・ザンスカール地方の旅について語った。真冬のみ凍結し渡ることができる氷の道・チャダル踏査行、ザンスカール地方ザンラ村のホームステイで見聞きした現地の人々の生活、人々との交流などが軽快な筆致と、80点以上の写真で描き出されている。1975～82年に雑誌等に寄稿した原稿に加え、今回新たに第7章以降を書き下ろした。かつて「チベットのツチヤ」と呼ばれた著者が、なぜ事件記者となり、そしてイギリスに渡ったのか。1995年にウイスキー評論家となった土屋守の原点となったラダック・ザンスカールの世界が語られる。

■ウイスキー文化研究所 1800円＋税



オシャレなスイスワイン
観光立国・スイスの魅力
井上萬葡 著



世界中で愛好者が増えているスイスワイン。その歴史・文化から、アグリツーリズムやワイン祭り、次世代の醸造家などの最新情報まで、ワインジャーナリストで在日スイス商工会議所（SCCIJ）会員の著者がたっぷり紹介。スイス各州産地別の特徴、チーズと料理、芸術家や文化人、また日本人との関わりなど、意外と知られていないエピソードを交えスイスワインの魅力が存分に書き記されている。

■クロスカルチャー出版 1800円＋税

近代建築そもそも講義
藤森照信、大和ハウス工業総合技術研究所 著



1857年、米国総領事ハリスは江戸城登城を許される。土足のハリスを迎えたのは畳に敷かれた錦の布と、その上で草履を履いた將軍家定。以降、公的な場は「脱がない（土足）」が原則となり…。『和』の建築は「洋」をどう受け入れてきたか。銀座煉瓦街計画、国産大理石競争、怪しい洋館群（擬洋風建築）、日本愛に溺れた英国人教授など、江戸東京博物館館長でもある建築探偵・藤森教授が語る全68話。

■新潮社 800円＋税

バー堂島
吉村喜彦 著



舞台は大阪の歓楽街キタのはずれ堂島川沿い、カウンター5席の（バー堂島）。還暦近い元ブルース弾きのマスターと、「クセの強い」常連客が織りなす悲喜こもごもの1年を4編の短編で描く。季節ごとのカクテルやウイスキー、おいしいおつまみなど、お酒が会話を媒介し話にオチをつける。作者は元サントリー宣伝部勤務だけにうんちくは生半可でない。

■ハルキ文庫、角川春樹事務所 580円＋税